

その昔々京都の謎々に 言及。「ラルーナ」の件 で悶着が生じる

共に鬼籍へと既に入られた敬愛すべき2人の人物への追慕を、何時の日か自分は記さねば、と心に掛けてきた。三神忠さんと伊藤正孝さん。前者は会津小鉄会あいつこてつかいに、後者は朝日新聞社に所属していた。

伊藤さんとは、「朝日ジャーナル」編集長と執筆者の関係で知り合った。彼の前任編集長時代に連載を始めた「ファディッシュユ考現学」で僕は毎週、建前と底意そこい、表と裏の落差を包み隠す個人や組織の撞着どうちやくを暴いていた。

とは言え、勇気有る連載ですね、などと周囲から称揚されると、片腹痛いのだった。書きたい事を書きたい時に書きたい所で書く。その構えは、「今週の目」と題して「an・an」の目次頁に連載していた時分から変わらない。にも拘らず、同然の内容を異なる媒体に寄稿すると、俄に褒め出す向きが現れる。

貴方こそは、精神的意匠ブライドに拘泥しているではないか。その度、僕は密かに侮蔑した。マネキン人形がブランド品を提げて青山通りを闊歩しているに過ぎぬ空疎な文章、と有り難き評価を与えてくれた批評家や作家が、十数年後、欧州銘柄の鞆を抱えた自身の娘、豚児の嫁と喜色満面、週刊誌なんぞに登場しているのを見ると、微苦笑を禁じ得ない。

話は、「ファディッシュユ考現学」へと戻る。87年9月20日、7時16分発のひかり2223号で僕は、伊藤さん、連載担当のY氏と京都に向かった。会津小鉄会で理事を務める三神さんと2度目の面談を行うべく。場所は京都全日空ホテル。入って右奥のラウンジ。到着すると、もう1名、強持でのS理事が待ち構えていて、2時間余り詰問された。

「どない心算つもりで書いたんや。言うてみい」

「申し訳有りません」、「申し訳ない? そんな通り一遍の言葉だけで済むと思っとんのか。京都の街、二度と歩けへんようにして欲しいんか」。

琴の音が流れ、幾組か見合いも行なわれる空間で、その一廊だけ、気配が異なる。返す言葉は見付からず、指を握り締める。

「まあまあ、お互い、冷静にならな。弱ったこっちゃ」、「と執り成してくれる三神さんが救世主に思えてくる。

その暫し前の発売号で、僕は「京都の謎」に言及したのだった。東都と比べたなら遙かに小振り、見知った向きと遭遇する可能性も高いのに此かも臆せず、家庭を築く年輩の男性と祇園町ぎおんまち

や先斗町を漫ろ歩きするノートルダムや同志社の女子大生が多いのは、如何なる理由を以てしてか。「源氏物語」という『密通物語』の歴史を有する古都には、不可解な事象が少なくない、と。そこで留めておけば、悶着は生じなかった。「ラルーナ」なる綴りのステッカーを車両の後部窓に貼っておくと、駐車禁止区域でもレッカー移動を免れ得る、割り込みしてもクラクションを後続車から鳴らされずに済む、との件が問題視されたのだった。時を移さず、三神さんから電話が掛かってくる。赤坂プリンスホテルに宿泊中の彼の客室へ赴いた。

「私等は構へん、何言われても。けど、この2人は堅気やで、お宅さんは堅気を殺める心算かいな」

言い終えると、三神さんは僕を見据える。優れて理詰めのものだ。僕は黙って頭を垂れる。会津小鉄会の会長、及び組長を当時に務めし人物の子息をも、拙文で言及していたのだった。

「ラルーナ」は、その組長が琵琶湖に保有する船艇群の総称でもあった。而して、京都の若者が好んで車両に貼っていたステッカーは「ラルーナ5」で、それは一番新しい船艇の名称と同一だった。加えて僕は、大津の地で営まれるスポーツジムのステッカーにも、同様の御利益を若者は期待している、と記していた。会長の子息が経営者だった。

「田中はん、組長の坊は未だ学生さんやで。会長の息子はんも真っ当に汗流しとる。そいう堅気を傷付けとうないんや、僕としても」

会長の子息は「朝日ジャーナル」の定期購読者で、僕の連載の愛読者でもあるのだ、と三神さんは続けた。その後、'91年に表社会のヤクザと称する向きも居る警察官僚なる集団が「暴力団対策法」を制定する際、それが如何に『愚法』かを理路整然と、高山登久太郎氏が開陳したのを想起する。而して三神さんは、当時に僕が付き合っていた一人が京都在住の女子学生で、組長の子息とも高校時代から彼女は知己である、と先刻御承知なのだった。

泡沫経済の崩壊後にトカレフを蟬谷に当てて、三神家の墓石の前で自害する彼は、世間一般とやらが想像する無頼漢とは凡そ異なっていた。相貌は、人の良さそうな町工場の経営者。然して、眼光が鋭い訳でもない。妙齢の女性が途中で部屋を訪れてきて、ばつが悪いのか狼狽し、

「下で少し待つとれ、美味しい物、食べさせるから」と扉を閉める。

「どないしょお、田中はん、弱ったこっちゃ。三神さんは幾度となく繰り返し、

「喉、渴いとるやろ、これでも飲んどつといて」、冷蔵庫から缶入り飲料を取り出すと乳白色のテーブルの上に置き乍ら、

「訂正、出して貰えんやろか」と継いだ。その中味が珈琲だったか果汁だったか、記憶は定かでない。

「訂正は、吝かではありませんが」。慎重に言葉を僕は選ぶ。改めて活字にする事で2人の名譽回復は果たせても、それが引き金となって、後追い記事が他媒体に掲載される可能性を排除し得ない。寧ろ、お二方に直接、お目に掛かってお詫び申し上げたい。会長、組長にも、お目もじさせて戴けないか。

すると三神さんは、「ちよつと、待つておくんなはれ。物事には手順が有りましてな」。直ぐには応じてくれず、逆に尋ねられた。誰か東京で親しい組の者は居らへんか、と。心当たりが居なくはなかつた。「せんたろつ」さん。東亜友愛事業組合の幹部。口髭を蓄え、フランス語を嗜む学卒者で、デイスコで挨拶を交わす仲だった。

幾度か、シャンパーニュの瓶を一緒に空けた記憶も甦る。ハンフリー・ボガードの映画に登場しそうな、日本人離れた顔立ちの彼は乾杯時、決まって「C'est la vie」と呟く。口元を緩めて和やかに微笑む彼の表情に、その一瞬、寂寥感が漂う。六本木に於ける彼の存在は文学なのだ、と感じたものだ。その彼も、泡沫経済の崩壊から程なく、若くして鬼籍に入った。

「田中はん、住吉に知り合いは居らんのですか」。首を振りながら、尋ねた。僕も又、首を横に振る。「弱ったこつちゃ」。と又してもチャイムが鳴る。或いは僕が仲裁を依頼した場合を見計らつて訪れたのか、住吉会の幹部だった。「何や、お姉ちゃんも一緒か。ほな、下で待つとつてや。一緒に鯔でも食おう」。

共に僕にとつては畏兄に当たる宮崎学、山城新伍の両氏とも旧識の間柄、と後に知る三神忠理事との想い出を今少し語り、供養する我が儘をお許し戴きたい。